

手と目

「看護の看という字は、手と目でできている。」これは、五年一貫の看護科へ入学した一年目に、先生から教わった言葉である。中学校を卒業してまだ間もない私は、漢字の成り立ちの面白さに感心した。今思えば、本来先生が伝えたかった趣旨を理解できていなかったと思う。その後も何度かこの言葉を聞いたが、実習の経験もほとんどなかった私は、具体的にイメージすることができなかった。この言葉の本来の意味を、私は四年生を迎える春に実感した。

高校の卒業式も終わり、春休み真っ只中のある日、私は病院に居た。心臓マッサージを受けている母の目の前で、祖母と伯父の隣で服の裾を握りしめて泣いていた。あまりにも突然の出来事に現状を受け止めきれず、「これが授業で習った死亡宣告か」と、どこか冷静に考えている自分がいた。おそらく、目の前で死亡宣告を受けたのが母であると、信じたくなかったのだろう。冷静な私の感情とは裏腹に、目からは大粒の涙が溢れていた。親戚も集まり、祖母や伯父が手続きを進めている中、私はただぼーっとして、泣いて、ぼーっとしてを繰り返していた。幼いころから、一人で私を育ててくれた母との突然の別れは、高校を卒業したばかりの未熟な私には抱えきれないものであった。

霊柩車が到着し、私は母と共に車に乗ることとなった。医療従事者の方々に深々とお辞儀をし、車に乗り込もうとしたとき、後ろから肩に触れる手の温もりを感じた。驚いて振り返ると、一人の看護師が真っ直ぐと私の目を見つめていた。人の目を見て話すことがあまり得意ではないはずの私の目は、看護師の力強い目に捕らえられたかのように、逸らすことができなかった。ほんの数秒の出来事であり、会話もなかった。だが、私はあの時の看護師の手の温かさと、力強い目に、背中を押されているような、温かく包み込まれているような、なにかを感じた。「大丈夫だよ。一人じゃないよ。」と言われているような気がした。霊柩車に乗り込み、葬儀場に着くまでの数十分、私は声を殺して泣くことができなかった。先ほどまでの冷静さはなくなり、母の死を嘆き、悲しんだ。

四年生もあつという間に終わりに近づき、最終学年を迎えようとしている。私は今でも、あの日の看護師のことをよく思い出す。名前も顔も覚えていないが、その時の感情は鮮明に覚えている。ふと母に会いたくて寂しくなった時、くじけそうになった時、あの手の温もりと力強い目を思い出して、頑張ろうと奮い立たせることができる。手と目がこんなにも一人の人間に影響を与えるとは、一年生のころの私は思いもしなかった。看護師の手と目の力を知った私は、与える側になることもできる。あの日の私が救われたように、手と目で護ることができる看護師に、私はなりたい。